

福建子に寄す——つとめて辛辣に『南宋道学の展開』を評す

早川 太基

はじめに

福谷彬氏の学生時代のあだ名は「福建」^{ふっけん}である。福建人である朱子のことしか頭がないからという理由でつけられたらしいが、どうしても王安石が呂惠卿を罵った言葉である「福建子」^{ふっけんし}が連想されてしまい、筆者などはそう呼んだこともあった。管底をさぐると「寄福建子〔福建子に寄す〕」と題する五言絶句が出てくる。

展卷夜沉沉 卷を展けば夜 沉沉たり
書窗燈影深 書窗 燈影 深し
海東學人眼 海東 學人の眼
夢見晦庵心 夢に見る 晦庵の心

この詩は、『南宋道学の展開』第一章のもとになった論文「孔孟一致論の展開と朱子の位置——性論を中心として」（『日本中国学会報』第六五号、二〇一三年）の抜刷をもらったときに詠んだ五絶である。ちょうど福谷氏とともに北京大学に留学していたころであり、夜の宿舍の窓辺に坐りながら、霧霾のなかに幻想的にかがやく

街灯の光を横目に見つつ、句が生まれていった。

今、一冊としてまとめられた『南宋道学の展開』を読んでも、抜き刷りを読み、詩を賦したときの記憶がよみがえる。福谷氏は、南宋道学のなかでも先行研究の蓄積がただならない朱子という巨大な対象に取りくみ、かつて孔子が周公を夢みたように、その眼のなかに朱子の姿を見た。本書は、しんみりとした夜気のなかで、隅々まで張りめぐらせた理性の糸を、一本一本解きほぐしながらページをめくってゆくのに相応しい一冊である。

とはいえ、いつまでも友人どうしで褒め合っても仕方ない。以下では令和四年十月八日に行われた日本中国学会における、『南宋道学の展開』についての座談会（書評シンポジウム）でのやりとりを依拠しながら、日ごろの研究領域である文学の立場から敢えて、つとめて辛辣に批評してゆこう。

一、研究方法の総評

まずは本書における福谷氏の研究方法を、十文字で批評しよう。

以史解道學、以道學解史
史を以て道學を解き、道學を以て史を解く

先行研究では内省的な面ばかりクローズアップされがちな道學は、じつは現実社会の政治をも含めた生なましい人的交流のなかで形成されていったことを、全体の中心線として、分析を展開している。つまり哲学とは、何か雲の上にある純粹無垢なものではなく、社会的な存在である人間の生みだした血の通った生き物であると言うのだろう。逆の方向から見れば、南宋政治史のどす黒い闇の底にうずまいている感情を多分に含んだ哲学思想の綾模様が浮かびあがったわけであり、いかに「哲史」一体の研究方法が有効に機能するかの見事な証明でもある。

しかし、この長所は、思想の解明という視点から見れば、同時に短所を示しているのは間違いない。批判を恐れずに言えば、「哲」は「史」の比重を増やせば増やすほど、ある意味では扱いやすくなる。本書では、扱いやすい形而下の問題によって論が組み立てられ、形而上の思想的課題については散発的に提示されている。つまり道學の「用」については極めてよくわかり、朱子・陸象山・陳亮・胡宏たちが交流して論争する姿は彷彿として眼に映り、臨場感をも覚えるほどなのだが、いつまでたっても著者における「体」の提示のされかたが片鱗のみであり、体系あるものとして浮彫にならない。南宋人における議論への内なる衝動の原因が、いつまでたっても見えてこない。

同時に、本書における朱子の取り扱い、きわめて客観的である。著者は終章において「本書が一貫して『朱子』ではなく『朱熹』

と記してきたのも、『道学諸派』という観点を示すなかで、朱熹を絶対視せず、できる限り相対化して考察することを心がけた」（三五三頁）と書いたことに象徴されるように、あえて距離を置こうと努力している。そこに浮かびあがってきた朱子は、南宋の政界をかき乱し、論争して相手から一本とるのが大好きであり、皇帝に私説を吹きこもるとする危険人物であった。これはまさに著者の意図するところであり、同時代人の見るところの等身大の朱子であった。

しかし現実問題として朱子という人物像は、等身大には収まりきらない。朱子学には、東アジアに時代を超越して広まっていっただけの普遍性があり、事実として何百年にもわたって著者である福谷氏をふくめた数多くの人を魅了し続けてきた。しかし、本書を読む限りでは、なぜ数ある道学のなかでも朱子学がもっとも大きな影響力を持つようになったかの理由は、まったく不明である。

きわめて穿った見かたをすれば福谷氏は、朱子学を公平に評価しようとするあまりに、かえって自らの朱子への主観的感覚におけるプラスの部分押し殺し、そこに逆に歪みが生じているのではないか。著者が終章・第四節「残された課題」において取りあげた「正統論」の問題は、もちろん大いに突きつめてもらいたいと思うが、これは著者の手腕であれば、さほど長い歳月をかけずに著述をものせるテーマであると考ええる。真に残された課題は、別にある。

福谷氏は言うなれば、その青春時代を朱子とともに過ごした。読者として期待してしまうのは、著者自身による朱子たちとの対話あるいは議論であり、その生なましいやり取りを是非とも聴かせてほしい。すでに、これだけの客観的にとらえる目を獲得した作者であればこそ、敢えて全ての武装を脱ぎ捨てて、そのまま直截に道学

者たちの方寸の「虚霊不昧」のなかに飛び込んでゆくような探求が可能であろう。著者は、ここまでの著述を成したからこそ、今や研究態度および方向性のさらなる展開を迫られているといえる。たとえば今こそ改めて静坐の工夫から始めてみては、どうだろうか。

二、研究の展開への期待——朱子との対話

今後における、「哲史」の研究手法の限界を打ち破るような更なる展開のためには、「文」つまりは言葉そのものへの重視が必要になってゆくのではないかと考える。座談会においては筆者は「朱子における言葉はなにを表しているのか。言葉はどこまで何を表せるのか」と問いかけた。福谷氏はこのように答えてくれた。

朱熹は言葉によって人間の内面の奥底、道理の精微を表現することに精力を傾けた。他方、太極図に代表される概念図を多く使用していたのは、言葉もまた考えを表現するための媒体の一つに過ぎないと考えていたことを示すのではないか。

この対話は、「文」と「哲」との感覚の違いを如実に表わして面白かった。文学の立場から述べるならば概念図もまた一種の言語であり、その存在意義についても、いわゆる文字にはできない何を表現するための役目を担うのかという視点から考察を重ねることも可能である。さらには言語こそが本質であり、それが生まれ、そこから生まれるわけであり、何か代替のきく意味での「媒体」では

ないと考える。

たとえば朱子の言葉づかいを考えてみよう。古来の宿儒による「仁」の訓話・解釈は多いが、しかし嘗て「仁者、愛之理、心之徳也（仁は、愛の理、心の徳なり）」という一句ほど簡潔にしてエレガントな数式をも思わせる「仁」の定義があっただろうか。朱子の注釈は、すばつと切り口するどく、もつとも美しき言葉で語られた孔孟の教えといえる。

朱子の文学的感性の鋭さについては、『毛詩』『楚辞』への注釈はもとより、南宋名家のなかでも優に一頭地を抜くであろう詩文の水準からも窺い知ることができる。吉川幸次郎は『五経・論語』解説「二（『全集』第二二巻）において「五経」が他の諸子百家を圧倒して中国思想と実践の規範となったのは、思想内容は勿論のことながら、その「名文性」が一因であったと述べている。朱子が両宋の数多ある道学者のなかでも卓越した存在たりえたのにも、同じことが言えるのではないか。ゆえに朱子という存在は、本質的に「文史哲」一体の研究方法を追求できる対象である。

ところで筆者の専門とするところの宋代詩学の特色は、言語による人間の内面への探求である。北宋後期以降、黄山谷・陳後山・陳簡齋たちは人の精神の微妙な動きの言語化に挑戦し、表現の世界を大いに掘りさげた。このような形なきものを言葉にするという図式に注目すれば、じつは道学諸派も同じように、人間の精神構造の言語化あるいは図式化に取りくんたという見方が可能である。従来の学界では、蘇東坡と程伊川との逸話に代表されるように、宋代における「文」と「哲」との相性の悪さにスポットがあたるが多かった。しかし今後もし、言葉の使いかたという点に注目すれば、

「文」と「哲」とを融合させ、さらには「史」も含めて「文史哲」を一体化させたかたちで大きく宋代の精神史を論じられる可能性があるのではないか。

じつは福谷氏も、すでに気づいている。座談会においては、第五章の「説得術」の分析を通して「朱熹の経書解釈などによく表れる『言葉』の選び方に対する思索の深さや入念さは、それ自体が研究に値すると感じた」と語ってくれた。同じ感覚を、道学における言葉づかいへと拡充してゆけば、福谷氏と朱子との対話は、より厚みを増すだろう。

三、研究の展開への期待——朱子学の社会的意義

本書の強調するところの道学の特色とは、すでに多く論じられる自己の修養である「修己」以外に、他者への働きかけである「治人」に重点を置くことである。つまり当時の問題意識に即していえば、聖人は学んで至れるのか、そして学ばせて至らしめることが出来るかである。

筆者はいささか意地悪に「福谷氏は『聖人』になれるのか。なりたいか。福谷氏は、早川太基を『聖人』にすることは可能なのだろうか」という問いを投げかけた。これは客観に徹して研究を進めることが基礎となる近代学術的方法論に対して、思想の実践というきわめて古典的かつ主観的な意識をほうりこむと、一体どのような化学反応が生まれるか見たかったからである。福谷氏は、次のよう

に答えてくれた。

道学の聖人可学論の重要な特徴は「学問によって」「誰もが」「理想的な人格」へと至ることができると考える点。言い換えれば、人間理性に対する信頼の思想であること。他者と共有可能な理想を持ち、それを目指して学問する者であれば、皆「すでに」聖人を志しているのではないか。

これはなかなか上手い返答であった。つまりは常に門戸はそこに開かれており、あとは福谷氏が、早川太基が、自分自身の問題として学問に志せるか否か、でしかない。こちらが難問を發したつもりが、逆に喉元まで突きつけられたわけである。

この福谷氏の返答は、道学の「操存」の意識にも直結するだろう。第二章「経書解釈から見た胡宏の位置——『未発・已発』をめぐって」における「心性」の捉えかたについての議論では、「自己に内在する理想状態は人間生活のいかなる局面に存在するのか、：朱熹は本心を把持して主体を確立している状態にそれを見出した」（一六頁）と述べている。朱子は内なる理性のこまやかな動きに敏感であり、この瞬間的に発動して持続してゆく感覚のなかに、そのまま聖賢の心に通ずるものを發見した。

朱子の道学は理論として美しい。しかし、けつきよく道学者たちは自分は聖人になれず、そして他人を聖人にさせられなかったように、現実社会での直接的効果という面では成功を収めたとは言いがたい。『南宋道学の展開』では第六章にあたる孝宗への三度の封事や、寧宗への進講によって南宋社会に何か変革はあったのか。理

学を好んだ理宗の国家経営は、はたして理想的なものであったか。極論するならば朱子の理論では、誰一人として成功しなかったともいえる。

不思議なのは、この当座の役には立たなかった敗者の哲学は、なぜか長い時間軸で捉えようと、東アジアという規模で大成功を収めたことである。まさに孔子との近似性を指摘できるわけであり、おそらくは「失敗原因＝成功原因」という奇妙な図式が成りたつ。朱子の道学における社会性・政治性という問題は、南宋だけに止まらず、そのあとの現代にいたるまでの長いスパンのなかで把握する必要があるわけである。ゆえに本書の続編としての『南宋以降の道学の展開』を期待する。

さて、ここまで述べてみると、著者にむかって問いかけてみたくなるのは社会性・政治性の究極としての朱子学の現代的意義である。果たして我等が生きてゆかなくてはならない二十一世紀の思想の糧として、朱子学は機能しうるのか。この難問についても福谷氏は、つぎのように答えた。

朱子学における「政治主体意識」の確立は、民主主義の問題に直結する。そして物事における「天理」「人欲」の見極めは、まさに官僚モラル・企業のコンプライアンスである。「社会法」は、国に依存しない地域に根差した相互扶助ネットワークの形成である。というわけで現代に必要な思想の糧ばかりではないか。

ぜひとも福谷氏に、この問題をまとめて書いてほしい。そして

掛け値なしに混迷の時代へと突進してゆく今日の世界において、朱子学に代表される道学の叡智を実践できる道すじを示してほしい。

四、個別の問題点

最後に気になった個別の問題点についても言及しておこう。

まず本書では、道学の聖人可学論における重要な側面として、他者を聖人へと教え導こうとする「治人」の思想が取りあげられる。しかし、この発想自体は孟子以降、道学以前の時代にも多く見られる。たとえば杜詩「奉贈韋左丞丈二十二韻」に「自謂頗挺出、立登要路津、致君堯舜上、再使風俗淳（自ら謂く頗る挺出し、立るに要路の津に登り、君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳ならしめんと）」とあり、ほかに柳宗元「為裴令公舉裴冕表」に「必能協和萬邦、致君堯舜（必ず能く萬邦を協和し、君を堯舜に致さん）」など枚挙に遑ない。このように見ると他者を聖人にする思想は、系譜的に追えるわけであり、宋の道学に限った話ではない。本書のように道学の特徴として説得力あらしめるには、この発想の前史について整理し、さらに道学との継承関係について論じておく必要がある。

第一章「孔孟一致論の展開と朱熹の位置——性論を中心として」では、王安石の尊孟論について詳述するが、なぜか一対ともいうべき司馬光の毀孟論については触れられていない。司馬光の著である所謂「温公疑孟」について余允文が反駁して「尊孟辨」を書き、さらに朱子は付随するかたちで「讀余隱之尊孟辨」を著した。この系統の資料は「性論」に関する部分は少ないものの、北宋からの孟子

論の流れが追えるのみならず、朱子の見解を探るためにも重要であろう。

第四章「淳熙の党争下での陸九淵の政治的立場——『荊國王文公祠堂記』をめぐって」の朱子の捉えかたは面白い。現在でも各所にありがちな、より攻撃的なトラブルメーカーこそが、かえって注目を集めてフアンを得やすいという図式を想起させる。しかし、陸象山の原文はあくまで不特定多数の「近世學者」（一八〇頁）にそのような傾向が見られるという批判であり、別に誰かを名指しにしてはいない。ゆえに本書のように、陸象山にとつての朱子は「悪夢のような党争を引き起こした北宋における王安石の再来だったのである」（一九九頁）と結論づけるのは、恣意的に挙げたところの状況証拠によって必要以上に朱子一人に責任を負わしめている懸念を抱かせる。論を成りたたせるためには、より詳細な考証が必要である。

第五章「説得術としての陸九淵の『本心』論」は全体的に、第一義的には哲学思想の問題であるのを、果たして「説得術」という技術的なとらえかたの範疇において取りあつかうのが効果的な分析方法であるか否かに疑念が残る。「説得術」というキーワード自体は、むしろ第六章「消えた『格物致知』の行方」における朱子の皇帝への進言を「説得術」として捉え、そこに用いるのが相応しいかもしれない。かりに朱陸両者の言葉を「説得術」の角度から分析するにしても、福谷氏の挙げた事例のなかでは、かならずしも社会的な意味において成功したとは言いがたい。このままの叙述では、技術的な有効性には、むしろ疑問符がつく。

第五章に話をもとせば、仏法についての議論や「無極・太極論

争」は、朱陸両者の個性的な視野における、ものの見えかたの違いを大いに反映しているわけであり、より本質的ともいえる純粹な思想的切口からのアプローチが可能であろう。もし敢えて陸象山のような視野のとりかたを「術」と称するのであれば、むしろ本章の「本心論」という材料のみでは捉えきれず、平生の論法そのものを全体的に論ずる必要がある。

おわりに

福谷彬『南宋道学の展開』は、「道学」の社会のなかに息づく姿を明らかにした。日常生活に食いこんだ哲学思想という関係性よりも、むしろ哲学思想こそが波乱万丈の日常生活を造りだす火種ともいえる構造を描きだしてみせた。本書を読むことを通して得られた視点は、筆者においては「哲学思想」をそのまま「文学」に置き換えるかたちで研究に生かせると思われる。

福谷氏は今や、学術の展望台のうえに立ち、次にどの山に登るか計画を進めているところであろう。本書の一読者としては、福谷氏の今後の研究の展開として、学術書として「著者と朱子との哲学的対話の総括」「道学の社会性・政治性の南宋以後の展開」を、一般書として「朱子学の現代的意義」を期待する。